



縁を生かす

私がまだ現職で管理職をしていた頃、本を読んで感動したことや、日常の学校生活で感じたことなどを書きとめて「つれづれなるままに」と題して教職員に配っていました。今日はその中から少し古いのですが、10年前のものを紹介します。(2016年5月18日号として発行)

五月も中旬が過ぎました。それぞれの学年が修学旅行、職場体験学習、地域学習を無事に終えることができました。気持ちを新たに、学習活動に集中できるようにご指導ください。また、新年度のスタートから一月半が過ぎました。そろそろこどもたちの人間関係においても新たな問題が起きてくるタイミングです。どうぞ、クラス内、学年内のこどもたちのようすもしっかり観察していただき対応していただけたらと思います。

今日は「心に響く小さな5つの物語」(致知出版社)という本の中からの素敵なお話を紹介します。

その先生が五年生の担任になった時、
一人、服装が不潔でだらしく、
どうしても好きになれない少年がいた。
中間記録に先生は、
少年の悪いところばかりを記入するようになっ
ていた。
ある時、少年の一年生からの記録が目
に止まった。

「朗らかで、友達が好きで、人にも親切。
勉強も良くでき、将来が楽しみ」とある。

間違いだ。他の子の記録に違いない。

先生はそう思った。

二年生になると、

「母親が病気で世話をしなければならず、
時々遅刻する。」と書かれていた。

三年生では、

「母親の病気が悪くなり、疲れていて、
教室で居眠りする。」

三年生の後半の記録には、

「母親が死亡。希望を失い、悲しんでいる。」

とあり、

右上に続く

四年生になると、

「父は生きる意欲を失いアルコール依存症
となり、子どもに暴力をふるう」

先生の胸に激しい痛みが走った。

だめだと決めつけていた子が突然、

深い悲しみを生き抜いている生身の人間
として自分の前に立ち現れてきたのだ。

先生にとって目を開かれた瞬間であった。

放課後、先生は少年に声をかけた。

「先生は夕方まで教室で仕事をするから、
あなたも勉強していかない？」

わからないところを教えてあげるから」

それから毎日、

少年は教室の自分の机で予習復習を熱心に
続けた。

授業で少年が初めて手をあげた時、

先生には大きな喜びがわき起こった

少年は自信を持ち始めていた。

裏面に続く

クリスマスの午後だった。

少年が小さな包みを先生の胸に押しつけてきた。あとで開けてみると、香水の瓶だった。亡くなったお母さんが使っていたものに違いない。先生は、その一滴をつけ、夕暮れに少年の家を訪ねた。

雑然とした部屋で独り本を読んでいた少年は、気がつくと飛んできて、先生の胸に顔を埋めて叫んだ。

「ああ、お母さんの匂い
今日は素敵なクリスマスだ」

六年生では先生は少年の担任ではなくなった。卒業の時、先生に少年から一枚のカードが届いた。

「先生は僕の母さんのようです。そして、いままで出会った中で一番すばらしい先生でした。」

それから、六年。また、カードが届いた。

「明日は高校の卒業式です。僕は五年生で先生に担任してもらって、とても幸せでした。おかげで、奨学金をもらって医学部に進学することができます。」

右上に続く

十年を経て、またカードがきた。

そこには、先生と出会えたことへの感謝と父親に叩かれた経験があるから患者の痛みがわかる医者になると記され、こう締めくくられていた。

「僕はよく五年生の時の先生を思い出します。あのままだめになってしまう僕を救ってくださった先生を、神様のように感じます。大人になり、医者になった僕にとって最高の先生は、五年生の時に担任してくださった先生です。」

そして、一年。
届いたカードは結婚式の招待状だった。

「母の席に座ってください」

と一行、書き添えられていた。（終）

「心に響く小さな5つの物語」より

著者 藤尾秀昭

発行所 致知出版社

そして、次のように先生方に呼びかけました。

私たちは教員を続けている限り、学級担任として多くのこどもたちに出会います。それこそ、三十数年担任をしていれば、多ければ1000人近くのこどもたちと出会うことになります。その出会ったこどもたちの名前と顔を、卒業して何年か過ぎた場合、あるところで偶然に出会って「先生、〇〇です。〇年生の時、担任してもらいました。あの時はお世話になりました。」と言われても、恥ずかしながら思い出せないことがあります。でも、こどもにとって「担任の先生」の存在はやはり特別ではないでしょうか。とりわけ小学校の場合は、授業を含めて学校生活のほとんどを担任と一緒に過ごすわけですから「どんな先生に担任をしてもらうか」は、その子のその後の人生を左右するとても重要なことなのでしょうね。いろいろな、そして多くの先生との出会いが、こどもにとっての「今までの自分」と「新しい自分」へと「変わるチャンス」になるのかもしれないね。教員としてのこども及びその子の親との縁、こどもの側からの担任としての縁。「縁を生かす」という物語をもう一度読み直して、教員という仕事のすばらしさをかみしめたいと思っていますところですよ。

文責＝青少年育成センター指導員 大本

※この「縁を生かす」という物語は、前任の藤村指導員が「青少年センターだより第119号（2021. 9. 15発行）」で「素敵な出会い」と題して紹介しています。